芥川龍之介「杜子春」論

――褒美としての「泰山の南の麓の一軒の家」の崩壊――

橋本裕梨

はじめに

芥川龍之介の童話として、「杜子春」はあまりにも有名な作品である。「杜子春」は鈴木三重吉が主宰した、『赤い鳥』という児童文芸誌に掲載された。「杜子春」の訓戒とした物語は小学校の教科書にも載り、杜子春の「お母さん」という叫びは多くの人々に感動を与えた。両親の愛情により悔い改めた杜子春に、仙人である鉄冠子は「泰山の南の麓に一軒の家」与え、物語は終わるのである。鉄冠子に褒美として「泰山の南の麓の一軒の家」を貰ったことは、一見、ハッピーエンドであるように思われる。

本論では、鉄冠子に貰った家、泰山という場所の特殊性について論じる。そして、「泰山の南の麓の一軒の家」の多くの論者による様々な見解について考察してゆく。また、鉄冠子に与えられた「片目眇」という特徴や言動の矛盾について論じ、杜子春は「泰山」に赴かない、赴くべきではないことを明らかにしたい。

なお、本文の引用は岩波版『芥川龍之介全集　第六巻』（全二十四巻）による。

第一章　泰山について

第一節　泰山という場所

テキスト「杜子春」は、

「おゝ、幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとやるから、早速行つて住まうが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が咲いてゐるだろう。」

と、さも愉快さうにつけ加へました。

で、終わる。しかし、この結末について大きな疑問がある。それは

鉄冠子が杜子春に与えた、「泰山の南の麓の一軒の家」の存在である。なぜ鉄冠子はわざわざ泰山の麓にある家を、杜子春に与えたのだろうか。そもそも泰山という場所は杜子春の言葉、「人間らしい、正直な暮し」にふさわしい場所なのであろうか。

『広辞苑第五版』によれば、泰山は中国の名山であると共に死者の集まる山ともいわれ、地獄そのものを表すときに用いることもあると書かれている。現在では世界遺産に登録されており、多くの観光客が訪れる。また、アニミズム信仰により、中国では山自体が神として崇められ、この泰山も古くから人々に信仰されてきたのだ。

後漢時代の学者である応劭によって書かれ、後漢の社会風俗や制度・典章などについて記した『風俗通義』では、世俗では、岱宗（泰山）に金の箱に入った玉でできた簡冊があって、人の寿命の長短を知ることができた。そして、泰山は万物の根源であり、昼夜が換わるところであり、雲は泰山の岩から生じ、あっという間に雨雲となり、一瞬に雨を降らすことができるのは泰山だけではないかと記されているのだ。

次に、中国古典での泰山の描かれ方について紹介する。『神仙伝』には「泰山老父」という説話が収録されている。漢の武帝が路傍に畑打ちをする常人とは異なる老人を見かける。頭上には高さ数尺もの白い光が見え、身体つきは五十歳くらいかとみられたが、顔は童子のような色沢があり肌も輝かしい。この老人は八十五歳の時にたまたま出会った道者に穀断ちの法を伝授してもらい、蒼朮を服して飲めと教えられ、不思議な枕もこしらえたという。これらの法により、次第に若返り、黒髪もまた生じ、抜けた歯も再び生えてきたのだ。武帝はその術の伝授を受け、老人に玉帛を下賜した。老人はのちに泰山の山中に入り、十年か五年ごとに時たま郷里に帰ってきたが、三百余年たつと、それっきり帰らなくなった。

この他にも、『搜神記』では泰山の神が登場する説話が収録されている。昔の人々にとって、泰山は神聖で想像力をかき立てられる特別な場所であったのだろう。だからこそ、「杜子春」での「泰山の南の麓の一軒の家」は大きな意味を持つのである。

第二節　泰山の家に対する様々な意見

特殊な山の為、「泰山の南の麓の一軒の家」を仙人が杜子春に提供したことは、「杜子春」の物語を一概にハッピーエンドとは言えないものにしてしまった。このことについて、様々に論じられている。

まず、仙人が杜子春に泰山の家を提供したことを肯定的に見る意見として、渡部芳紀氏は「変身した〈人間らしい、正直な暮らしをするつもり〉になった杜子春に、その生き方を賞賛するかのごとく、

〈桃の花が一面に咲い〉た家と畑をやるのである。」[1]という見解を示し、高橋龍夫氏、張蕾氏、関口安義氏、山崎甲一氏等も、肯定的に論じている。[2]俗世間から離れることこそ、杜子春が導き出した答え、「何になつても、人間らしい、正直な暮し」を実現できるという意見が多い。

また、山敷和男氏は、「杜子春傳」の近代化した姿の一つとして、「泰山の南の麓の家」が与えられたと論じており、[3]これは前田愛氏の「泰山の麓の一軒の家」を「東京の郊外の住宅」と位置付ける論に通じるものがある。[4]

しかしこれらの意見とは対称的に、真杉秀樹氏や頓野綾子氏は「杜子春にとって泰山の南の麓は、流刑地的ユートピアである。」[5]と、この結末に否定的な見解を示し、小林幸夫氏は「杜子春が即座に泰山の麓に赴くとは思えない。」[6]と、杜子春が泰山に赴くこと自体に疑問を呈した。そして宮坂覺氏は、

洛陽の町が、〈人間社会〉とすれば、この〈泰山の南の麓に一軒の家〉は、「仙境」、「桃源郷」に限りなく近い。なぜ、〈人間らしい暮らし〉を展開する場にはほど遠い空間にある〈家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い〉と勧めたのか。〈今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだろう〉とも〈誘惑〉に近い言説を付与したのであろうか。それも、〈さも愉快さうにつけ加へ〉たのである。仙人は、なぜ、杜子春の〈人間社会復帰〉に餞ならぬ障害を与えたのであろうか。これは、「おお、幸、」と、韜晦的言葉で切り出し〈さも愉快さうにつけ加へ〉、最終試験を試みたと考えられないだろうか。

―（中略）―階梯を踏んで成熟してきた杜子春は、潔く断って洛陽の町に復帰していったと読むのが自然であろう。[7]

と、泰山の家の提供は最終試験であり、成長した杜子春はこの試練にみごと合格するであろうという新たな見解を示している。

このように多くの論者によって、「杜子春」の結末は様々な論じられ方をしている。けれども、一般的には「泰山の南の麓の一軒の家」に対して、肯定的にみる意見が多いように思われる。しかしながら、「泰山」という場所の不自然さは無視することはできないのだ。

やはり「泰山の南の麓の一軒の家」に住むことが、杜子春にとって人間らしい暮らしを営むのにふさわしい場所であるのかが、疑問に残るのである。鉄冠子が気まぐれに与えた家だとしても、あまりに不自然な場所にあるのだ。

第三節　泰山に住むということは

杜子春が「泰山の南の麓の一軒の家」へ赴き、住むと仮定した場

合、一つ気になることがある。鉄冠子が「今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだろう」（傍線引用者）と述べているように、桃の木があるということである。この桃は多くの読者に、「桃源郷」を連想させるのではないか。

中国では桃に対して信仰がとても篤く、不老不死の象徴として扱われている。そして何よりこの生命の木でもある桃の木と桃の実は「桃源郷」を象徴するのである。東晋末から南朝宋にかけて活躍した詩人陶淵明作の「桃花源記」では、桃の花が咲き乱れた桃の木林の奥に桃源郷が存在した。芥川龍之介は最初、「杜子春」の季節を「秋」としていた。しかし、再度考え直して、季節が秋では、童話として冷たい感じがするので、暖かい雰囲気の春に切り替えたのだという。[8] 原典である「杜子春傳」での季節は「冬」となっているのだが、わざわざ「冬」から「秋」さらに「春」に変えたのは他にも理由があったからではないだろうか。やはり、桃の花の持つ意味が、「杜子春」のラストに必要不可欠であったのではないかと考えるのである。

そして、桃の木は多くの中国古典の中に登場する。『酉陽雑俎』に収録されている説話では、古くからのいい伝えによると、長白山（山東省）はむかしの粛然山（泰山の東岳）である。燕の時代（三九八～四一〇）、桑門（出家僧）の釈恵胥杜言う者が広固城（山東省）からこの山頂の平坦地にやってきた。鐘の音を耳にしたので、しばらく進んでいくと、突然、煌びやかな寺が見えた。入ると一人の沙弥（少年僧）がいたので、中食を乞うと、沙弥は桃の実を一つ摘んでくれた。間もなく、さらに一つを与えてから、恵胥にいった。「ここにおいでになってだいぶ逗留なされた。もうお引き取りください。」恵胥が外に出て、後ろを振り返ると、寺はもうなくなっていた。広固に戻って、弟子に会うと、「和尚さまがいなくなってから、二年になります」という。そこで、桃の実は一つ一年のしるしであったと、恵胥ははじめて悟ったのだ。

中国宋代初期に成立した類書『太平御覧』では、後漢の明帝の永平五年、劉晨と阮肇が天台山に仙薬の一種の穀皮を採りに入ったが、道に迷ってしまった。食糧はなくなり、飢えと疲労のために死ぬ寸前になったが、はるか山頂に桃の木があり、たくさんの桃の実が眼に入った。二人は、桃の実をいくつか食べると、飢えがなくなったばかりか、元気が出てきた。途中で谷川の水で口を漱いだりしようとすると、山腹から新鮮な蕪菁の葉と胡麻飯の粒がついた容器が流れてきた。そこで二人は人家が近くにあるのだと考え、二、三里ほど川を遡った。すると谷川のほとりに二人の美しい女が立っており、劉と阮の顔を見ると二コニコしながら劉と阮の名前を呼んだ。婦人たちは劉と阮を家に案内してもてなし、大勢の女がみな手には三つ

四つの桃の実を持っていた。あまりの居心地の良さに十日ほど滞在したが、故郷が恋しくなり婦人たちに帰らせて欲しいと言った。すると婦人たちは「あなた方がここにいらっしゃったのは前世からの福運に導かれたからでございます。どうして帰りたいなどとおっしゃるのですか」というので、それから半年間そのまま滞在した。そこの気候はいつも春のようであった。そのうち二人は帰りたいとしきりにせがんだので、婦人たちは仕方なく劉と阮を見送り帰り道を教えた。二人は郷里に帰ってみると、親戚や知人たちはみな死に絶え、誰一人顔見知りがいない。人々は二人の七代のちの子孫であった。晋朝の太元八年になって、劉と阮はまたふと家を出たまま、どこへ行ったかわからなくなってしまった。

中国の桃源郷型の異界説話は一種の隠れ里型伝説でもあり、神仙道術の思想の影響を受けている。その多くは仙郷譚といえるような独特なユートピア伝承となったという。[9] 桃源郷が神仙道術の思想の影響を受けていることから、桃と仙人は密接した関わりを持っているのであろうことは疑う余地もない。桃の木が存在し、現在は花が咲いている「泰山の南の麓の一軒の家」は、まさにこの二つの桃源郷説話に登場するような仙郷であるといえるのではないだろうか。仙郷である「泰山の南の麓の一軒の家」に住むということは、仙人の存在を強く感じながら、いつまでも鉄冠子に依存し続かなければならないのだ。杜子春と鉄冠子にとって、この関係はふさわしいものであろうか。

また、一つ目の説話の主人公恵胥は比較的短い滞在であったので人間界に復帰できたが、二つ目の説話の主人公劉晨と阮肇は半年間以上の滞在により、人間界への復帰は不可能になってしまった。人間界の時間はとうに過ぎ、人間界での生きる場所を失ってしまった。劉晨と阮肇が再び仙郷に赴いたであろうことは、想像に難くない。

このことを踏まえると、杜子春が「泰山の南の麓の一軒の家」に住むということは、人間界への復帰を絶望的とするものであろう。

第二章　片目眇

第一節　隻眼の神々

「杜子春」において鉄冠子という仙人の存在は、より重要な役割を担った人物であると考える。その鉄冠子の注目すべき大きな特徴は「片目眇」であるということだ。原典である「杜子春傳」での道士には、特筆すべき身体的特徴はない。ところが、芥川は「杜子春」で鉄冠子に、片目眇という身体的特徴を与えたのだ。

芥川は河西信三に宛てた書簡の中で、鉄冠子について触れている。「なほなほ又あの中の鉄冠子と申すのは三国時代の左慈と申す仙人の道号に有之候。」と書いているように、鉄冠子は左慈なのだ。

左慈は、『後漢書』、『搜神記』、『神仙伝』、『三国志演義』などに記されている仙人である。左慈についての記述はほとんど同じだが、『後漢書』、『搜神記』では記されていなかった左慈の容姿について、『神仙伝』では詳しく書かれている。その容姿は「片目が眇で、青い葛織の頭巾を着け、青色の単衣を着ている」とあるのだ。そしてこの『神仙伝』の左慈に脚色を加えたのが、『三国志演義』に登場する左慈である。『三国志演義』では左慈について「眇で跛で頭には白藤冠を戴き、身には青瀬の衣をまとった」先生で、三十年の間峨眉山で道教の修行をしていたと書かれている。「杜子春」の鉄冠子は『三国志演義』の左慈がモデルであろう。けれども芥川は、作中に八仙の一人である、呂洞賓作の詩を登場させている。呂洞賓を題材にした雑劇はきわめて多く、もっとも有名で庶民が称えるにふさわしい仙人である。[10]

なぜ、芥川の「杜子春」の仙人は呂洞賓ではなく、左慈なのであろうか。芥川「杜子春」の鉄冠子にとって、左慈の眇という身体的特徴は必要不可欠であったのではないか、と考えるのである。鉄冠子が左慈であるということだけでは、決して見逃すことのできない特徴ではないだろうか。

片方の目の障害、いわゆる隻眼は多くの伝承や神話の中で登場する。神が片方の眼を怪我するという話は数多くあるのだ。栗の毬や松で眼を突かれた神や、大根に躓いて転び、茶の木で眼を傷つけた神もいたという。柳田國男氏はこれらの神々による片目の怪我は、在世中の出来事と断定している。[11] そして、北欧神話に登場する神「オーディン」は、知恵と魔術を身につける為に片目を失ったとされている。

また、隻眼は鍛冶職との関係性もよく指摘されている。鍛冶は職業柄、年中火の色を観察している。そのとき、片目で見つめるのだが、そのために目が次第に悪くなり、ついに失明に至る。一種の職業病で、古く鍛冶職には隻眼の人が多かった、とする説がある。[12] 隻眼と鍛冶職の関係について柳田國男氏は、

一眼盲するものを俗語でカンチまたはメッカチなどと呼ぶのは、すなわち鍛冶のカヂから出た語で、もとこの工人が焼刃の曲直を検するに一眼を閉じて見るで負うたというはすこし疑いがある。—中略—そこで自分の考えるには、今はすでに不明に帰したある理由から、特に片目の人間を選んで金屋の業に就かせた時代があったのではあるまいか。なお一歩を進めて言えば、片目の人には何か特殊の力があると信ぜられたことが、これを鍛冶にもすればまた水の神の仕人ともしたのではあるまいか。[13]

と、論じている。そして、むかしの人たちは、鉄鉱石や砂鉄を鉄塊

に還元する神秘な力をもつ、眼の傷ついた人―村下（たたら炉の指図をする責任者）に畏敬の念をもち、これを神としてあおいだのである。[14] ギリシア神話のゼウスの神の盾を作ったのはキュクロープという片目の老人であり、外国でも同じ観点であったようだ。[15] また、祭りの日に神主として選ばれた者の片目を傷つけられ潰される一つの風習があったという。このことについて柳田國男氏は、一目でなければ神の代表者たる資格がないという風に、信ぜられていたのではないかと述べている。[16] 古くから人々は隻眼に神秘性を見出し、その姿に神を投影してきたのである。

また、柳田國男氏は山に住む異形のものは隻眼である、という説を論じている。柳田國男氏は『百鬼夜行絵巻』で川童は眼が二つであるのに対し、山童は眼が一つに描かれている事を指摘して、一つ目の妖怪の多くが山奥に住んでいると述べている。[17] 土佐の山村では山鬼、山父、山爺といった妖怪が一眼一足であったことが伝えられている。しかし、一つ目の妖怪は必ずしも一つ目小僧のような額に目が一つあるものだけではない。山爺は、「きわめて人間の眇者に近似したもの」であり、片方の眼が潰れている顔も一つ目と表現され、各地域の多数の神々はまさにその姿とされているという。[18]

また、柳田國男氏は一つ目小僧や一つ目入道といった妖怪も、人間の姿かたちをしている以上は額に目が一つというのはあるまじきことであり、実は山神の眷属にして眇という一つの特徴を持った神の成れの果てではないか、という仮説を立てている。そして「何ゆえにひとり山に住む異形のみが、そのような特徴をもってひろく知られていたかは、必ずしも気まぐれなる小さい問題ではない。」[19]と語っている。

第二節　圧倒的な存在としての身体的欠如

片目眇の老人である鉄冠子は、若く健康な体を持つ杜子春より弱者であるように思われる。けれども鉄冠子は仙人であり、杜子春よりも圧倒的な力を持っているのだ。ここで、力関係の逆転の構造が表れる。「羅生門」（『帝国文学』大正四年十一月）での下人と老婆との力関係とは、まったく正反対となっているのだ。この、力関係の逆転を象徴しているのが、片目眇という身体的欠如ではないかと考える。第一節で論じたように、隻眼は神々の象徴として崇められ、人々は神秘性を見出してきた。だからこそ、数多くの隻眼の神の伝承があるのだ。

この身体的欠如についてフランスの人類学研究者、クロード・レヴィ＝ストロースが次のことを述べている。

オジブワの六人の神々は自分で目隠しをしている盲目であり、目隠しをはずした仲間を追放した。ティコピアの泥棒神ティカ

ラウは、ごちそうを巧みに盗むために、脚の悪いふりをした。アカルイオ・ボコドリも脚が悪い。目が見えないとか脚が悪い、片目が悪いとか片腕がない人は、世界中の神話にひんぱんに登場し、わたしをめんくらわせる。これらのひとびとの状態は欠如を示しているからだである。しかし、要素の除去により不連続になった体系が、数の上では貧困化したにしても、論理的には豊かになったのと同様に、神話はしばしば身体不遇者や病人に肯定的意味を与えている。彼らは媒介というものの様態を体現しているのである。[20]

この力関係の逆転は、「龍」（『中央公論』大正八年五月）の原典の一つである、『宇治拾遺物語』の「蔵人得業、猿沢池竜事」にも表れている。蔵人得業であった恵印は大きく赤い鼻であるために「鼻くら」と呼ばれていた。そこで人々を騙そうと思い猿沢の池のはたに「某月某日に竜が昇る」という札を立てた。その立札は評判となり、その当日恵印も猿沢の池に行くものの、結局竜は出現しなかった。その帰途に恵印は盲人と出会い「あな、あぶなの目くらや」と声をかけるも、盲人に「あらじ、鼻くらなり」と返される。偶然恵印のあだ名と符合したのだ。偶然とはいえ、忌々しい自らのあだ名で返されたことは、恵印にとってさぞかし屈辱であっただろう。盲人は「あな、あぶなの目くらや」という恵印を、見事遣り込めた形となったのだ。

しかし、本当に偶然であったのだろうか。神話や説話の中で、身体的欠如を持つ者は時として圧倒的な存在として描かれる。勿論鉄冠子やこの盲人も例に漏れず、そのような存在として杜子春や恵印を圧倒するのである。

第三章　結末

第一節　鉄冠子の眼差し、矛盾する発言

また、鉄冠子はこの「片目眇」で、杜子春を「じっと見つめる」描写が三度登場する。この三度の凝視は、鉄冠子がより積極的に杜子春を見定めようとした結果ではないかと考えるのである。また、鉄冠子が「じつと」見つめる時には、何か新しい事柄を行う前となっているようだ。

まず、鉄冠子は初めて杜子春と出会う場面で、「じつと」杜子春の顔を見ながら声をかけた。そして、黄金を与えたのだ。ここで、鉄冠子がきまぐれで杜子春に声をかけ、黄金を与えたわけではないことがわかる。鉄冠子は何らかの意図により、杜子春に黄金を与えていたのだ。ところが、二度目に黄金を杜子春に与える場面では、鉄冠子が「じつと」見るという描写がない。しかし、三度目に鉄冠子が杜子春に黄金を与えようとした際に、「お金はもう入らないの

です。」という杜子春を、「じつと」見つめた。ここで、鉄冠子は杜子春が何を考えているのか、見定めようとしているのではないだろうか。

また、ここの場面で注目すべきは、鉄冠子の発言である。己の怠惰な生活を反省することもなく、他人を非難する杜子春は決して「感心に物のわかる男」ではないであろう。そして仙人志願をする杜子春を、鉄冠子は再び「どこか物わかりが好ささうだつたから」と評したのだ。この言葉が決して本心ではないということは明らかである。なぜなら、鉄冠子は杜子春のことをしっかりと見定めていたからだ。ここに、この鉄冠子の老獪さを見る。この鉄冠子の老獪さを、村松定考氏は「二枚舌を使う老獪な人物に印象付けるような結果になってしまっている」[21]と論じているが、この老獪さは左慈の影響によるものであろう。鉄冠子のモデルである『三国志演義』の左慈は、魏王曹操をさんざん翻弄・嘲笑し激怒させた人物である。飄々とした老獪さは左慈から受け継いだものではあるが、芥川は鉄冠子の老獪さを視線によって巧みに表現していたのだ。杜子春が気付かない所で、杜子春を「じつと」見て、すべてを見透かし見定めようとしていた。しかし、杜子春本人に対しては二度も黄金を与え、「物わかりが好ささう」と評し、弟子にすることを快く承諾するのである。杜子春にとっては、好々爺の仙人という印象でしかないであろう。

けれども三度目の凝視は、その前の、二度の凝視とは勝手が違うようである。

試練に失敗した杜子春が、

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる訳には行きません。」

と、言ったことに対し、鉄冠子は「ぢつと」杜子春の顔を見ながら、

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ。――お前はもう仙人になりたいという望みも持っていまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな。」

と、語ったのだ。今まで杜子春の前では好々爺を演じていた鉄冠子が、ここで初めて、杜子春に厳しい言葉を投げ掛けたのだ。鉄冠子が、杜子春の成長を認めたことによる変化ではないかと考えるのである。これが鉄冠子の本来の姿であり、真意の吐露は鉄冠子から杜子春への餞の言葉ではないだろうか。

第二節　褒美としての「泰山の南の麓の一軒の家」の崩壊

まず、第一章で述べた通り、「泰山」は特殊な場所であり、「何に

なつても、人間らしい、正直な暮し」をする場所としてはふさわしいのか否かで意見が分かれている。第一章第三節で紹介した中国の桃源郷型異界説話では、仙郷と人間界は異界であり、時間の流れる速さも違っていた。杜子春が「泰山の南の麓の一軒の家」に住むということは、人間界との決別を意味するのだ。

そして、山に住む鉄冠子の「片目眇」の特徴も、大きな意味合いを持つ。山の麓の池に住む魚が、その山に住む隻眼の神にかぶれ、片目を失ってしまった、という伝承がある。[22] 片目眇の鉄冠子が所有していた家に住むということは、杜子春も片目、またはその代償となるものを支払うことになるのではないだろうか。それは間違いなく人間界での暮しであろう。洛陽を捨て、泰山に向う杜子春の姿は、中国古典にて人間界を捨て、山に入り仙去した多くの仙人たちの姿と被るのだ。

いくら杜子春が「何になつても、人間らしい、正直な暮らし」（傍線引用者）と言っていても、杜子春はもう仙人になる気はない。自ら答えを導き出した杜子春に、わざわざ鉄冠子が家を提供してやる必要はないであろう。これからどのように生きるかは杜子春次第であり、だからこそ「何になつても」と言ったのだ。必ずしも「人間らしい、正直な暮し」が、「泰山の南の麓の一軒の家」にあるとは限らない。

また、鉄冠子はただの好々爺ではない。老獪さを持った仙人である。杜子春への甘言は何らかの意図が内在しているのだ。この、

「おゝ、幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだろう。」

は、杜子春への甘言と言えないだろうか。

やはりこの結末は、宮坂覺氏の「最終試験を試みた」[23]という論が一番有力ではないかと考えるのである。鉄冠子は、最後の最後で再び杜子春へ甘言を投げ掛けたのだ。しかし、この甘言は今までの甘言とは意味合いが異なってくるであろう。今の自分にとって、何が一番必要かは杜子春自身が知っているからだ。それは仙郷の家でないことは確かである。もちろん、杜子春が断るであろうことは鉄冠子も承知しているであろう。芥川の描く鉄冠子の性質を理解した今、戯れに近い甘言であることは想像に難くない。

おわりに

これまで述べてきたように、泰山は人間である杜子春にとって、ふさわしい場所ではないことは明らかである。芥川は決して「泰山」という場所の特殊性知らなかったわけではないであろう。芥川が中

国古典に大変あかるいことを考慮すると、あえて泰山という場所を挙げたのではないかと考えるのだ。

また、鉄冠子の特徴「片目眇」について論じたが、鉄冠子に片目眇の特徴を与えたことは、芥川にとって大きな功績であると言っても過言ではない。鉄冠子である仙人に片目眇の特徴を与えたことにより、その対照的な立場として杜子春をあまりにも無知で幼い若者へと改変したのではないだろうか。そしてその関係はみごと力関係の逆転を生み出し、芥川は「杜子春傳」の道士を、鉄冠子という老獪な仙人に昇華させることに成功した。芥川「杜子春」において、鉄冠子は影の主人公であると考えるのである。

あらゆる中国古典の知識を詰め込み、芥川の面目躍如といった人物が鉄冠子であり、「泰山の南の麓の一軒の家」であり、芥川「杜子春」の本質と言えるのではないだろうか。

註

（1）渡部芳紀「杜子春」『國文學』十二月臨時増刊号　昭和四十七年十二月二十五日　學燈社

（2）高橋龍夫「杜子春」の物語性『解釈』一・二月号（第四十五巻）平成十一年二月一日　教育出版センター

張蕾『杜子春』をめぐる諸問題『鶴見日本大学』第三号　平成十二年三月十五日　鶴見大学

関口安義「杜子春」『芥川龍之介と児童文学』平成十二年一月三十一日　久山社

山崎甲一「杜子春」の収束部について―研究、批評ということ―東洋第四三巻六号（九月号）抜刷　平成十八年九月

（3）山敷和男「杜子春」論考『漢文学研究』九号　昭和三十六年九月　早稲田大学

（4）前田愛　栗原彬・本田和子・山本哲士共著『学校化社会のストレンジャー＝子どもの王国』昭和六十三年二月　新曜社

（5）真杉秀樹　挑発する仙人――『杜子春』――『芥川龍之介のナラトロジー』平成九年六月二十日　沖積舎

（6）頓野綾子　指標としての「赤い鳥」――「杜子春」の評価をめぐって――『中央大學國文』第四十四号　平成十三年三月二十五日　中央大學國文學會

（7）宮坂覚「杜子春」論――〈揺らぐ〉仙人の言説・〈消された〉末尾の数行――『芥川龍之介を読む』梅光学院大学公開講座論集　第五十一集　平成十五年五月三十一日

（8）赤羽学　芥川龍之介の「杜子春」の自筆原稿の紹介『岡山大学文学部紀要』（通号四）昭和五十八年十二月　岡山大学

（9）伊藤清司『中国の神話・伝説』平成八年九月三十日　東方書店

（10）袁珂『中国神話・伝説大辞典』平成十一年四月一日　大修館書店

（11）柳田國男「一つ目小僧その他」『柳田國男全集』平成一年十二月四日　筑摩書房

（12）西宮一民校注『古事記』新潮日本古典集成　昭和五十四年　新潮社

（13）柳田國男「片目の魚」『柳田國男全集』平成元年十二月四日　筑摩書房

（14）松山義雄『新編伊那風土記　隻眼の神と御霊信仰』平成六年五月十日　財団法人法政大学出版局　二十四頁

（15）（12）に同じ

(16) (11) に同じ
(17) (11) に同じ
(18) (11) に同じ
(19) (11) に同じ
(20) クロード・レヴィ＝ストロース　早水洋太郎訳『神話論理Ⅰ　生のものと火を通したもの』平成十八年四月十四日　みすず書房
(21) 村松定考　唐代小説「杜子春伝」と芥川の童話「杜子春」の発想の相違点『比較文学』昭和四十年十二月　通号八　日本比較文学会
(22) (13) に同じ
(23) (8) に同じ

（二〇〇七年　卒業）